

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## The Gilyak Observed by Rinzo Mamiya (1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 九祚 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004647">https://doi.org/10.15021/00004647</a>

## 間宮林蔵の見たギリヤク族(1)

加 藤 九 祚\*

The Gilyak Observed by Rinzo Mamiya (1)

Kyuzo KATO

Rinzo Mamiya, a Japanese explorer, reached the Siberian continent via Sakhalin island in 1809. He is famous for his re-discovery of the Tatar strait. He also gained immortal fame for his ethnographic survey of the Gilyak living on the lower Amur, and of the native population of Sakhalin. He described the above-mentioned peoples in *Totatsu Kiko* (Travels among the East Tatar), and *Hokui Bunkai Yowa* (The Story of the Northern Tribes) written in 1910. These works were translated into German and included in *Nippon*, Ph. Franz von Siebold's book, written in 1832. Mamiya's ethnographic descriptions have contributed to the academical world. Leopold von Schrenck, who did research on the lower Amur region from 1854 to 1856, and published *Die Völker des Amur-Landes*, consulted Mamiya's work. Later, at the beginning of the twentieth century, Shternberg carried out his field trip among the Gilyak of the lower Amur region, and contributed much to the study of the Gilyak society and religion. He too appreciated Rinzo Mamiya's work.

Under the present soviet regime, Chuner Taksami, a Gilyak scholar, and Anna Smolyak, a scholar from Moscow, are carrying out a systemetic study of the Gilyak people.

I have tried to pursue the ethnographic value of Mamiya's work and studied it critically referring to work done by later scholars. This is a first attempt in Japan. There is no doubt that Mamiya's work has immortal classical value in the field of the ethnographic study of the lower Amur people and the native people of Sakhalin island.

---

\* 国立民族学博物館第1研究部

- |                                      |                  |
|--------------------------------------|------------------|
| はじめに                                 | 5. ギリヤクの婚資について   |
| 1. 「スメレンクル」と「ギリヤク」の意味                | 6. ギリヤクの「理髪」について |
| 2. ポリアンドリーに関する林蔵, シュレンク, シュテルンベルグの見解 | 7. ギリヤクの揺籃について   |
| 3. 性生活                               | 8. 住居および倉庫について   |
| 4. ギリヤクにおける結婚と性関係の規準                 | 9. 犬の飼養について      |

## はじめに

間宮林蔵〔以下林蔵と称す〕は江戸時代までの日本において、自分の意志によってシベリア大陸に渡り、観察報告を残した唯一の人である。

明治以後、林蔵の生涯については多くの研究が発表された。洞富雄による伝記の巻末には40点にのぼる文献があげられている〔洞, 1963〕。しかし鳥居龍蔵の論文「間宮林蔵と東韃地方」をのぞいては、私が以下においてとりあげようとする方向のものはなく、また鳥居龍蔵のものにしても、民族学的ディテールについてまで検討されているわけではない。

筆者は以下において、林蔵の調査報告の中でも、彼以外のいかなる日本人もなし得なかった「スメレンクル夷」（ギリヤク）に関する記述について、彼以後のシュレンク、シュテルンベルグ、クレイノヴィチ、スモリャク、タクサミらの学者の調査研究を参照しながら一種の追証を試みたい。

周知のように、シーボルトの不朽の大著『日本』の第7章には、林蔵の『東韃紀行』と『北夷分界余話』<sup>1)</sup>のドイツ語訳とその註がほどこされている。林蔵の報告はこのドイツ語訳によって世界に紹介され、現在も外国の研究者によって利用されている。筆者は以下において、林蔵の著作の民族学的価値を問うと同時に、シーボルトの訳文についても可能な限り検討してみたいと思う<sup>2)</sup>。シーボルトの業績は不朽であるが、少なくとも林蔵の著作に関する限り、現在の研究水準にたった新訳（英語などへの）が必要であることは疑いをいれない。なお、林蔵とその後の研究者たちの間には、か

1) 『北夷分界余話』は別名『北蝦夷図説』として有名である。安政2年刊の版本が『北蝦夷図説』という書名であったので、それに基づいて昭和19年に大友喜作編によって北光書房から刊行された本も同じ題名になっている。しかし国立公文書館所蔵の写本は『北夷分界余話』となっている。本文ではこの写本を利用したが、そう長いものでないので、引用ではいちいちページをあげないこととした。なお『北夷分界余話』にはほかに『北蝦夷地部』、『北蝦夷島新説』、『北夷新図説』、『北夷紀行』、『北夷見聞録』、『銅柱余録』などの別名がある。

2) シーボルトのテキストには、1832年の刊本に基づいて1975年講談社で刊行されたものによった。以下、引用文では刊年を省略する。

なりの年代的なひらきがあるが、ギリヤクの社会や生活技術はロシア革命の前、少なくとも100年あまりの間ほとんど変化がなかった。例えば、氏族の分布についてであるが、タクサミは指摘している。「ニヴヒの分布を歴史的に見るとき、その境界は過去100年あまりの間、変化しなかった」[ТАКСАМИ, 1969 : p. 54]。ただ近年、コルホーズへの統合政策とともに大きな変化が起こりはじめているのである。

林蔵がサハリン西岸のギリヤク集落を訪れたのは1808年<sup>3)</sup>と1809年、アムール河下流部に入ったのは1809年であって、毛皮を求めて進出したのはロシアのコサックたち(ハバロフやポヤルコフ)よりは約100年おそいが、シュレンクが本格的に調査した1854—56年よりは約45年早い。しかもコサックたちが提供するギリヤクの民族学的資料は、林蔵のそれに比べると少ないので、シュレンク以前の観察資料としては、彼のものがもっとも充実したものであると言える。シュレンクはシーボルトの訳文を通じて間宮林蔵の業績を知り、“Man verdankt sie dem japanischen Reisenden Mamia Rinso,” …… (人々はそれを日本の旅行家間宮林宗〔蔵〕に負っている)と書いている [SCHRENCK, 1881—1895 : p. 116]<sup>4)</sup>。この場合の sie とは、シュレンクによれば、“eingehenden Nachrichten über die Wohnsitze der Giljaken” (ギリヤクの住地に関するくわしい情報) のことである。またサハリンの民族についてもシュレンクはつぎのように書いている。“Die ersten Nachrichten über die Völker Sachalin’s verdanken wir wiederum den Japanern, und zwar denselben Reisenden, Mogami Tok’nai (1785 und 1786) und Mamia Rinso (1808~1810)” (サハリンの諸民族に関する最初の情報についても、われわれは同じ日本人に負っている。すなわち最上徳内と間宮林蔵である) [SCHRENCK, p. 121]。

シュレンクは林蔵のことを以上のように評価している。また後にのべるように、シュテルンベルグも林蔵を高く評価している。林蔵の話をきいて、これを書物にまとめた村上貞助は『北夷分界余話』の凡例の中で「倫宗〔林蔵〕の性、言苟もせざる者なれば、其自見分せざるのことは総て演話することなし」と書いている。間宮林蔵がアムール河下流部に滞在したのは1809年7月2日から8月6日までの約1カ月にすぎなかったが、それまでサハリンでギリヤクの生活についての予備知識を得ていたとはいえ、その観察は全体として実に正確である。その一つの理由は、彼が単なる旅行者あるいは観察者ではなく、ギリヤクの人々と生活をともにしたからであろう。そのことは後にのべるように、シュテルンベルグによっても指摘されている。

3) 「カラフト」が離島であると確認されたのはこのときのことである。

4) Schrenck の著作は以下すべて同じであるので、刊年を省略する。

## 1. 「スメレンクル」と「ギリヤク」の意味

まずギリヤクの名稱についてふれておこう。林蔵はギリヤクのこと「スメレンクル夷」と称しているが、シュレンクはこれについてつぎのように説明している。すなわち、「クル」はアイヌ語で人、「スメレン」はサハリン・アイヌ語の *Ssumari* (キツネ) に由来している。したがって「スメレンクル」は「キツネびと」の意で、ギリヤクがキツネの毛皮を取引したためか、あるいはそれを着たせいであろうと考えている [SCHRENCK, p. 117]。

ところで「ギリヤク」という呼称はどうか。多くの学者は、ツングースが周辺諸族から *Kili* とよばれていたことに結びつけているが、スモリャクによればアムール河下流域の住民はギリヤクとツングースの区別を、言語は勿論、文化の面でも明確に知っていたから、両者を混同するはずがないとのべている。そしてスモリャクは、17世紀にこの地域に進出したロシアのコサックたちがすでに、ギリヤクについてこの呼称を用いていたことに注目し、ウリチ、ナナイ、オロチ、ネギダルなど、アムール河下流域のツングースがギリヤクを「ギレ」とよんでいたことに由来するのではないかと、のべている。ギリヤクの自称は、アムール河下流部で *Nivx* サハリン東岸の場合で *Nigvyng* で、いずれも「人」の意である [Смоляк, 1975 : p. 25]。

## 2. ポリアンドリーに関する林蔵、シュレンク、シュテルンベルグの見解<sup>5)</sup>

女性の社会的地位について、林蔵はするどい観察を行っており、シュテルンベルグは、林蔵の方がシュレンクよりも見るべきものを見ていると指摘している。

『東韃紀行』<sup>6)</sup>の中に「……殊に女を貴て、男夷は徒に奴僕の如くなれば……」という一文がある。シーボルトのドイツ語訳では、“*Hier zu Lande ist es nämlich Gebrauch, dass die Frauen über die Männer befehlen……*” (この地では女性が男性に命ずることが行なわれている) となっているが [SIEBOLD, p. 1177], これについてシーボルトは “*Es wäre demnach die Nord-Westküste von krafto das einzige Land der Erde, in welchem Polyandrie nach Gesetz oder Sitte dermalen in Uebung wäre*” (これによれば、カラフトの北西岸はポリアンドリーが法制的または慣習的に行なわれている地球上唯一の地である可能性がある) との註を付している [SIEBOLD, p.

5) 以下記述の順序は、原則として林蔵の『北夷分界余話』の記述にしたがった。

6) 『東韃紀行』については昭和13年刊の南満州鉄道株式会社大連図書館本によったが、これも全文が短いので、いちいちページをあげないこととした。

1206]。

これに関連してシュレンクは、“nirgend, weder auf Sachalin, noch auf dem Festlande, herrscht unter den Gilijaken Polyandrie” (ギリヤクにあっては、サハリンでも大陸部でも、どこにもポリアンドリーは存在しない) とのべ [SCHRENCK, p. 649], さらに林蔵が “Stolz und Eiterkeit und vielleicht auch Furcht vor seiner Regierung” (自尊心と虚栄心, さらにには自国政府にたいする怖れのために), 彼がギリヤクのもとで不面目な立場と待遇をうけたことをかくそうとして, 事実を曲げて報告したのではないか, と書いている [SCHRENCK, p. 650]。 “Unwürdige und undemüthigende Stellung und Behandlung” (みじめで不面目な立場と待遇) とは, 林蔵が『東韃紀行』の中で, 自分が「常に女夷に媚ひ, 専ら其作業を助け, 木実草根をとらん迎, 出<sub>テ</sub>行<sub>ク</sub>時は船を漕ぎ行て其作業を共にし, 或は衣服を裂て是に与へ杯す」とのべていることをさしていると思われる。

ところが, 19世紀末から20世紀はじめにかけて活躍したロシアの民族学者シュテルンベルグは, ギリヤク社会にポリアンドリーが行なわれたことを論証してつぎのようにのべている。「ギリヤクのポリアンドリーの性格を明らかにするには, ギリヤクの生活の最も私的な側面に立ち入り, その言語を知り, 彼らのユルタで長く生活し (このことによって間宮林蔵は, シュレンクの見なかつたものを見ることができた), 少なくとも親族名称を知る必要がある。シュレンクは言葉を知らなかつたため, これを知ることができなかつた」 [ШТЕРНБЕРГ, 1933 b: pp. 129–130]。

こうしてシュテルンベルグは, 少なくともこの問題に関する限り, 林蔵を碩学シュレンクの上においている。またシーボルトは, 「地球上唯一の」という形容詞を別にすれば, ギリヤク社会にポリアンドリーが行なわれていることを, 林蔵の記述の行間からいみじくも洞察したのである。

ギリヤクにおけるポリアンドリーの実例についてシュテルンベルグは書いている。「兄弟が妻を共有して同居し, 両者の間に完全な諒解のある例をいくつも観察した。私のギリヤク語の最初の教師であるタンギヴォ村出身のギベリカは, 全サハリンを通じて最も富裕で尊敬されている人物であったが, いつもその弟のプレウンと同じユルタに住んでいた。そしてプレウンと兄の妻との関係は誰にとっても秘密ではなかつた。子どもたちもふたりの父親に同じ態度で接し, またふたりから同じようにかわいがられた。プレウンの死後は, 彼の財産は, 世間からギベリカの子どもと考えられた子どもたちに移った。プレウンはたいへん富裕で数人の妻でも買うことができたが, 兄の妻を愛した。兄は, 高い値段で買った自分の妻を共有することに少しも反対しなかつた。

た」。そしてシュテルンベルグが、兄弟で妻を共有することについてギリヤクの若者たちにきくと、彼らは驚いたようにきき返したという。「ロシア人はそうでないのか。兄の妻と同居するのがなぜわるいか」。ロシア人はそうでないと答えると「それはたいへん困ったおきてだ」と言って、信じられないような面持で互いに顔を見合せたという [ШТЕРНБЕРГ, 1933 a: pp. 33-34]。

またクレイノヴィチはシュテルンベルグの約20年後であるが、兄弟で妻を共有しているいくつかの例を記述している。例えばブリヴォ部落のピルギン(兄)とタルキン(弟)の場合である。タルキンとピルギンの妻ラウリクの関係は公然としたもので、誰も彼らを非難するものはなかった。3人は同じ食卓で食事をし、同じ寢床に眠った。兄弟はラウリクを間にはさんで両側に眠った。子どもが生まれると、ふたりがともに「わが子」とよんだ [КРЕЙНОВИЧ, 1973: p. 282]。

しかし一夫多妻の現象は、シュテルンベルグの時代、全くふつうの現象であったが、一妻多夫の例はすでにそう多いわけではなかった。シュテルンベルグは親称名称の研究によって一般的な結論を引き出したのである。

### 3. 性 生 活

林蔵はギリヤクの性生活が自由であり、女性が色気たっぷりであることを指摘している。たとえば、ギリヤクの女性は「其情蝦夷島女夷と大に異にして、相識さる人といへ共能馴昵し、言語通ぜざれば其云処瞭然ならずといへ共、時気寒暖の応接などなし、いかにも婉情妖態多ク、男子に接するのさま親意殊に深しと云」[間宮, 1938: p. 72]。この引用文の末尾に「と云」とあるのは、記述した村上貞助が「林蔵がそう語った」という意味で書いたものである。

この部分のシーボルト訳は、“Sie sind gastfrei und höflich, und grüssen jeden, dem sie nur immer begegnen, selbst Fremdlinge” (彼女たちはもてなしがよく親切で、会う人は誰でも、未知の人さえも歓迎する)であるが [SIEBOLD, p. 1199], どういうわけか「婉情妖態多ク……」以下の部分が脱落している。この場合の grüssen は「挨拶する」ではない。ギリヤクでは、情のうつることを警戒して、ふつうは出会うときも別れるときも挨拶しないからである。

林蔵はまた別のところで、「男女多淫の俗習なれば姦通邪淫の事許多也」(シーボルト訳では、“Da dieses Volk üppig und wollüstig ist, und sehr häufig deshalb Liebesabenteuer Statt finden, auch Untreue und Liebeshändel an der Tagesordnung sind” [SIEBOLD, p. 1203] となっている。

シュテルンベルグによると、ギリヤクにおいては性的感情がわりあいよく発達している。ギリヤクの生業がいわば季節的漁撈であって、余暇が多いこともその理由の一つとしてあげられよう。男性の精力を消耗させる狩猟は、彼らの生活ではたいした役割を果たしていないし、戦争らしい戦争もない。あるのは、せいぜい氏族間のトラブルぐらいなものである。

また狭い住居（住居については後にのべる）の中に数家族が住んでいることも早熟の原因であろう。ナナイ人の作家ホッドジェルの小説の中に、アゴアカというナナイの娘の結婚初夜の状況がつぎのように描写されている。「アゴアカは、ウルスカ（新夫の名）が彼女の毛布に入ってきたとき、恥かしそうに身をちじめ、体をこわばらせた。彼女はその夜幸せであった。兄弟たちが彼女のそばで、夜ごとにその妻たちを可愛いがる様子を見て気持をたかぶらせ、早熟になり、早くから自分が女であることを感じていた彼女は、この夜、自分の夫を愛し、彼に身をすり寄せ、そのぬくもり、力、耐久力にひたりきった」[ХОДЖЕР, 1964 : p. 50]。ナナイとギリヤクは、いうまでもなく、場所によっては混住し、生活様式の面でも多くの点で共通している。

ギリヤクの男性は成人と同時に性生活をはじめ、その余暇と想念のほとんどが女性に向けられた。それに、誰も彼もが結婚できるわけではなかった。つまり多夫一妻と同時に一夫多妻の風習もあり、婚資 (kalym) がなければ嫁をもらうことができなかった。そこで独身の若者たちは、自分の部落の手の届く女性だけでなく、時間と距離にかかわりなく、女性を求めてよその部落に出かけて行った。ギリヤクは本来客好きであり、いろいろなニュースを知りたがったので、よそ者でも歓迎された。「新来の客人は到着後数時間のうちに部落じゅうの家々をまわり、自分のもってきたニュースを語る。男も女もこれに熱心に耳をかたむける。客人はその間に、そこにいる女性に目をつける。それ以後は彼の経験とテクニックがものを言うことになる。ギリヤクの女性は一見、たいへん近づきにくいように見える。坐ったきりで眼を伏せ、話しかけても蚊のなくような声で答えるだけである。しかしこれはあくまで外見だけで、まわりの家族にわからないように、気を引くような視線をなげる」[ШТЕРНБЕРГ, 1933 a : p. 249]。林蔵の言う「婉情妖態」とはこれをさすのであろう。

客人がある程度彼女の気に入る男であれば、ことは急速に進行した。男は女が水場や木の実とりに出て行くのをつけて行ったり、いきなり物かげでつかまえたりした。また例えば、「煙草をいっしょに吸おう（同じ煙管で交替に吸うこと）」とか、「ニュースを話そう」とかいうような象徴的な言葉で話しかけることもあった。ここで内諾が得られれば、客人はそこに一泊したとき、夜半彼女の寝床に行ったり、その反対で



あったりした。言葉をかけないで、男が女の胸や足にさわって抵抗をうけなかったら、それで女の諒承が得られたことを意味したという。

既婚女性の場合には、もともと好きで結婚したわけではなく、それに年齢的にも女性が若すぎたり、あるいは複数妻であったりする場合が少なくなかったことも、自由な性関係の理由であろう。未婚男女の場合はもっと自由であった。シュテルンベルグは、ピグルナイカという未婚の一女性は、自分の未来の夫を含めて同時に14人の愛人と交渉をもっていたとつたえている [ШТЕРНБЕРГ, 1933a : p. 250]。

しかし、こうした自由は、一方では子どもにたいする愛情、生活のための苦勞などによって抑制されるだけでなく、社会的規範によっても制約される。すなわち、つき合ってはならない間柄の人々との交渉はきびしく追及されるのである。この追及は、しばしば自殺をもって終るほどである。しかし、妻の浮気の現場が夫に見られた場合でも、妻が殺されることはない。これについて林蔵は書いている。「此夷種（ギリヤク）より山旦、コルテッケ、其他韃地の諸夷、女夷はいかなる過失ありといへども殺すことなき法とす。其女を貴ぶの情しるべし」。

シュテルンベルグによれば、彼の調査した20世紀初頭、ギリヤクにおける男女の比率は男1,000人にたいして女785人、オホーツク海岸では女694人であった。これに加えて、裕福なギリヤクは2～4人の妻をもっていたから、一般には「女不足」の現象がみられ、妻をもらうには高い婚資を必要としたのである [ШТЕРНБЕРГ, 1933a : p. 167]。

#### 4. ギリヤクにおける結婚と性関係の規準

シュテルンベルグは書いている。「もしも道徳というものを、一定の社会において一般的に認められた原則に従うことであるとすれば、ギリヤクは理想的な性道徳を保持していると言える。というのは、ギリヤクが彼らの間に許されているグループ婚的性道徳にたいして驚くほどの忠実さを発揮するからである。……ギリヤクの女性は、金銭で自分を売るロシア人の女性をひどく軽蔑する……」 [ШТЕРНБЕРГ, 1933b : p. 26]。

ここで言うグループ婚とは、シュテルンベルグの言う *Трехродовые брачные союзы* (3氏族間の婚姻関係) を基盤とする複雑な親(姻)族関係に基づいている。

この関係を理解するには、まずギリヤクのあらゆる社会関係の基盤をなす「氏族」について知る必要がある。結婚もさまざまな儀礼も氏族を単位として行なわれるからである。スモリヤクの調査によると、19世紀末から20世紀初頭にかけて、ギリヤクの

氏族は67を数えた<sup>7)</sup>。その中の一部は人数が多く、アムール河下流部、サハリンにまたがっていた。例えば Kegngang 氏には少なくとも70家族、Ygnun 氏には30家族以上が属していた。しかし多くの氏族は2～5家族からなり、1～2の集落に住んでいた [Смоляк, 1970 : p. 270]。

ギリヤクの人口は1926～27年の調査で4,076人（うちソ連領サハリンに1,700人、大陸部に2,376人）で、ほかに当時の日本領サハリンに111人住んでいた。その後1959年の調査では3,717（うちサハリンに1,798人）、1970年の調査で総数4,400人であった。したがって、1926～27年の場合で、1氏族あたり平均およそ60人、1家族を15人とすれば4家族ということになる。

ギリヤクの氏族名は、熊、アザラシ、鳥などの動物名、人のあだ名、1年の月名、場所名などに由来するものが多い [Таксами, 1969 : p. 56]。

氏族はその発展過程で別のグループに分れて別の土地に移ることがあったが、その場合にはもとの氏族につたわる火打石を分与された。

もうひとつ重要なことは、ギリヤク社会では、各氏族の成員はすべて4つのクラスに分けられたことである。すなわち、祖父と曾祖父たち (atak), 第2は父 (ytyk) とその兄弟たちおよび母の姉妹の夫とその兄弟たち, 第3は自己の兄弟と姉妹たち (tuvn), 第4は子どもたち (ola) である [Смоляк, 1956 : p. 872]。そしてギリヤクの親族名称で示されるのは、家族単位ではなくて、氏族を単位とした人々のクラスである。例えば, tuvn という言葉は兄弟姉妹の意味であるが、遠近の血縁関係で結ばれた同氏族内のあらゆる兄弟姉妹を意味している。兄 (akan) は自己の実の兄だけでなく、父親の兄弟すじにあたるすべての人々の子どもをも示す。同様に子ども (ola) という言葉はわが子だけでなく、自己の兄弟の子どもすべてを言うのである。したがって、ギリヤクの親族名称はすべて複数形であらわされる。

さて、ここでギリヤクの婚姻の問題にもどらう。

林蔵はギリヤクの結婚について書いている。「結婚同姓を忌むこと、其いはれを聞かずといへども、殊に甚しとす。本邦従兄弟相忌ざるの類絶てなさざるところなり」。シーボルト訳ではこの部分が欠落している。林蔵のこの観察はたしかに表現が不十分ではあるが、しかしギリヤク社会を知るうえで、わりあいに重要であると思われる。ギリヤクはたしかに「同姓」(氏)や「従兄弟」の結婚を「忌」んだが(族外婚)、そ

7) 人口約4,000人のうちで67の「氏族」を数えたというから、この場合ロシア語の род は「氏族」というよりも、英語で言う lineage にあたると考えられる。全体として、ロシア語の род (氏族) とか племя (血族, 部族) という言葉の概念が不明確に使われることが少なくない。しかし、ここではいちおう「氏族」のままとした。

れは父方の氏族だけであった。氏族の中核は男性であって、女性は他の氏族に属すべきものと考えられた。息子は自分の氏族の成員であるが、娘は必ず他氏族に出るべきものと考えられた。すなわち「母方交叉イトコ婚」が支配していた。林蔵が「同姓を忌む」というとき、このことをきびしく考慮に入れる必要がある。シュテルンベルグは書いている。

「それぞれの母親は自分の息子のために、自分の兄弟（実家の）の娘を嫁にもらう権利をもつ。そして同じ権利によって、自分の娘たちは必ず自分の夫の姉妹の家庭に入らねばならない。言いかえれば、すべての女性は自分自身の従兄弟に、すなわち父の姉妹の息子たちに属している。したがって、女子は、自分の母親の兄弟の息子たちに嫁することはできず、男子は、父親の姉妹の娘を嫁にもらうことはできない。つまり兄弟と姉妹の家族どうしでの通婚は許されない」[ШТЕРНБЕРГ, 1933b : pp. 39-40]。

この関係を図示すると図1のようになる。

この図は、つねに「自己の氏」に女性を供給する *Almalk* の氏と、つねに「自己の氏」から女性を供給される *Ymgi* 氏とがあって、たがいにグループとして婚姻の義務と権利とを示している。したがって、各氏族間の結婚当事者の数がつりあっている場合は1対1の夫婦が幾組もできるが、そういうことはむしろ稀で、男女数の比率のくずれる場合が少なくない。例えば、*Almalk* の氏に娘がひとりだけで、「私の氏」に息子たちが多い場合には、息子たちはひとりの娘を妻として共有することになり、そ

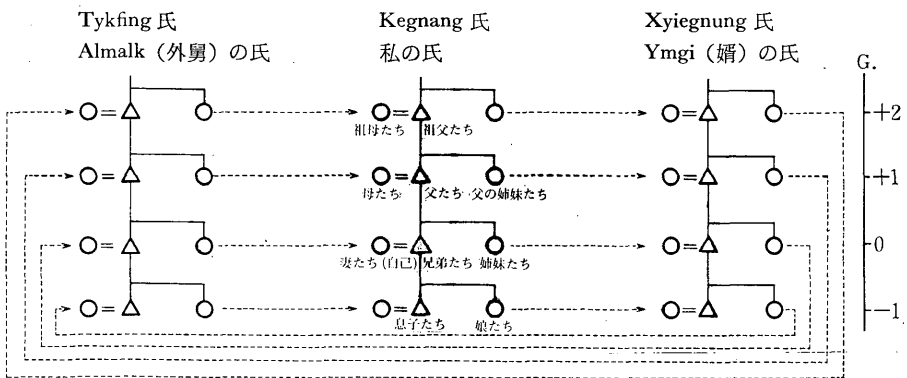


図1 ギリヤクの3氏族婚姻関係

- 註 1) これは最も単純化した図式である。  
 2) この関係は現在ではくずれており、1926~28年当時調査したクレイノヴィチは、すでに兄弟の息子と姉妹の娘たちの結婚が行なわれていたことを指摘している。また、自己の世代には、クレイノヴィチによると、自己の兄弟も含まれる。

の逆の場合には、多くの娘が少数の夫を共有することになる。また、息子たちにしても、長兄たちと末弟との年齢差が大きい場合には、末弟が成人するまでに、Almalkの娘たちがみな「私の氏」の長兄たちの妻になってしまう。こうなると、もはや末弟の相手になれる娘はいないことになり、末弟は“あぶれる”ことになる。ここで、その解決策として、弟たちはすべての兄たちの妻（兄嫁）および自分の妻の姉妹と性関係を結ぶ権利をもっている。ただし、兄は、弟の妻に手を出すことは許されない。シュテルンベルグやクレイノヴィチは、兄弟がひとりの妻を共有している例を観察している。また、ギリヤク出身の学者タクサミは書いている。

「こうした婚姻の規準は、残存的現象として、現在にも残っている。例えば、1956年から1962年までの調査で、私は6つの二人妻の例を見た。原則としてふたり目の妻は長兄の未亡人であった。また、長兄の未亡人または亡妻の姉妹と結婚している家族も見られる。そのほか、兄弟たちは、おたがいの子どもたちをみな“わが子”とよぶ。子どもたちは、父親の兄弟たちをみな父とよび、母親の姉妹をみな母とよぶ。ただ pila（年長の）、matki（年下の）という言葉をつけ加えるだけである」[Таксами, 1969 : p. 57]。

## 5. ギリヤクの婚資について

林蔵はギリヤクの結婚における婚資の出現について観察している。そもそも、ギリヤクにおける古来のグループ婚がくずれたしたのは、クレイノヴィチによれば、婚資の出現以後のことであるという [Крейнович, 1973 : p. 293]。しかし、婚資の出現にはそれ相当の理由があった。私の考えでは、それは交易によってギリヤク社会に貧富の差が生じたこと、女性の数が相対的に少ないことによるものと思われる。

林蔵は書いている。「凡婚を結んとする時は、婿たる者の家より、多くの宝貨を舅家に贈りて、其女を請ふことなり。大抵酋長たる者は、宝貨の最上となす所謂ベッチ<sup>8)</sup>などに、奴僕一人を添贈るを結納の例とす」。

シュテルンベルグは、ギリヤクにおける婚資がはじめ「婿の家族または氏族が嫁の

8) ベッチについては、Савеллвева と Таксами の共編になる『ギリヤク・ロシア語辞典』に п'єтв として колвчуга (鎧) と訳されている。シーボルトは Bettsi と表記しているが、Вではなくて、Рが正しいようである。林蔵は「コルデッケ夷 (ゴールド) の製するところにして、甲冑の類なるものなり。満州諸夷また皆是を宝とす。其製薄鉄を以て札とし、獣皮を以て是を綴り、裏亦獣皮をつく。其状図のごとく、殊に粗製にして、用器となすべき物にあらずといへども、夷中第一品の宝器となし、凡闘争の事ある時は、酋長たる者、其他富貴の者は皆是を被る」とのべている。このベッチについては、チュクチやイテルメン族における骨製の鎧との関連、あるいは鉄片製鎧の原郷が日本であるかどうかなどの問題をめぐって多くの見解がある [Антропова, 1957: p. 216]。

家族または氏族に贈りものをする」意味であって、売買行為では決してないことを強調している [ШТЕРНБЕРГ, 1933 a : p. 141]。

シュテルンベルグは、林蔵の約100年後における婚資についてつぎのようにのべている。すなわち、富裕な人の場合には中国産の絹織物、綿織物、中国製の外套、軟玉製品、銀のぞうがんにされた満州産の槍、日本刀、日本製の釜、キツネやテンの外套、女性の装身具が贈られ、貧乏人にあっては小舟、銃、犬などであった。妻の実家に労働を提供する方法もあり、また年賦も行なわれた。ときには20年にわたることもあった。

嫁の方からも嫁ぎ先にさまざまな品物を持参したが、これは婚資の額に応ずるとは言え、彼女の私有物であり、彼女が死ねば、その娘のものとされた。

## 6. ギリヤクの「理髪」<sup>9)</sup>について

ギリヤクは、原則として生涯頭髪を切らない。赤んぼうの頭髪がのびると、それを額にたばねて結ぶ。十分に長くなると、後頭部にたばねて紐で固定する。さらにのびると、垂らして二重、三重に編み、何巻かに巻いて、刺繡のある布切れで端末をしぼる [КРЕЙНОВИЧ, 1973 : p. 245]。

2次の性徴の出現とともに、男女ともに1本の垂れ髪に編む。男は生涯1本のままであるが、女性は結婚後2本に垂らす。シュテルンベルグは、女性は13~14歳になってメンスが現われると、結婚しなくても2本に垂らしたとのべている [ШТЕРНБЕРГ, 1933 a : pp. 13-14]。

アムール河下流部では、場所によっては、女性は第1児の出産後ガラス玉のついた特別のかもしをつけた。

女性は両耳に耳飾をつけた。クレイノヴィチは1926~28年当時は、昔一部のギリヤク男子は一方の耳にのみ耳飾をつけたという話をきいている。なるほど林蔵の示すギリヤクの「男夷」の図には明らかに左右どちらかに耳飾が描かれている。

つぎに、洗髪の方法についての林蔵の観察が興味深い。「女夷梳頭の状、図の如く口に水を含み居てしばしば櫛目を濕し梳頭す。男夷は大抵みづからする者なく、女夷をして是を理せしめ、又相互にする者をも見る」。シーボルト訳では、“Ihr langes Haar kämmen sie mit einem vorher nassgemachten Kamm, den sie, um es gemächlicher in Zöpfe theilen zu können, in den Mund halten; denselben Dienst leisten

9) 「理髪」とは林蔵の表現である。林蔵は『北夷分界余話』の中で、キトウシの「奥地は満州附属の夷スメレンクルと称する異俗の者住居す。其人物は理髪、耳飾ともにヨーロッパに異ることなしといへども、容貌何となく少しく上品なり……」と書いている。

sie den Männern.” [SIEBOLD, p. 1199]。この部分を直訳すると、「彼女たちはその長い髪をあらかじめ湿した櫛で梳くか、髪をゆっくりと編髪に分けることができるように、その櫛を口に固定する。彼女たちは同じことを男たちにもしてやる」となり、林蔵の記述とはかなりちがっている。

クレイノヴィチの観察によるとつぎの通りであった。まず編髪をほどき、左右に真半分に分け、自分で片方ずつそれを洗う。洗いは、まず頭半分の髪の末端をにぎり、口にふくんだ水で少しずつそれを濡らし、その濡らした部分をもって頭半分の髪の根もとをて

いねいにこする。よごれた水は下におかれた受け皿に流れ落ちる（これは林蔵の図にも描かれている）。洗った後は櫛できれいに梳いて、シラミなどをとり出した。それから、洗った髪を耳にかけた紐に固定し、同じ要領で残りの頭半分を洗髪して、しばらく乾燥させた。それから他人に梳いてもらうことになるが、母親は自分だけでなく、娘や息子たち、夫の髪をくしけずった。ここでも、ギリヤク社会の性関係の規準が支配しており、兄弟は姉妹から梳いてもらうことができず、弟の妻は兄の髪を手入れすることができなかった [Крейнович, 1973 : pp. 245-246]。

林蔵は、口に含んだ水を櫛にかけて湿し、それで髪を梳くとのべているが、これはどうも、反対に髪の方を湿すというクレイノヴィチの観察の方が合理的なようである。櫛に水をかければ、水はそのまま流れ落ちてしまうではないか。シーボルトもそれを不自然と感じたらしく、図の方を見て、「櫛を口に固定する」と訳したのかも知れない。しかし、一時的には林蔵の観察通りの方法もあり得ると考えられる。

## 7. ギリヤクの揺籃について

ギリヤクの女性は出産の 때가近づくと、住居のそばにつくられた産小屋に移って子どもを産む。生まれた後は、両親は子どもの息災を願ってさまざまな儀礼を行なうが、とくに重要なものは火、山、海に向かっての祈願である。それが終わると、父親は、朝



図2 ギリヤク女性が髪を梳いている図  
（『北夷分界余話』より）



図3 ギリヤクの揺籃（『北夷分界余話』より）

日の最初の光のあたる木を切り倒し、それをくり抜いて揺籃をつくった。子どもの頭のあたる部分は三角形、背中の部分は四角で、そりのゆるやかな「ハツ橋」状をなし、下端には腰掛けられるように木部が残され、肛門のあたる部分に排泄物用の穴がくり抜かれている。

揺籃には犬やウサギの毛皮が敷かれ、赤んぼうはこれにくるまれた。腰掛の部分には腐木の屑が敷かれた。赤んぼうの性器は、男女を問わず白樺樹皮製のおおいでかくされた。このおおいは、臍あたりから股下までにいたり、下端は排泄物用の穴にさしこまれていた。つまり、幼児の小便も自然に下の穴に流れ落ちるように工夫されていた。林蔵は、「其下木器を置いて遺尿をうくる物とす」とのべている。林蔵の言う「木器」は、多くの場合白樺樹皮製であったが、それには排泄物を吸いとるための腐木の屑が詰められた。ギリヤクでは、この木屑の捨て場も、きびしく定められていた [Крейнович, 1973: pp. 351-352]。

女性のメンスは、最も忌避され、また恐れられたものであったから、子どもの排泄

物にもそれがかかってはならなかった。そのため、女性便所と子どもの排泄物捨場の間には、生後数日のうちに、イナウを結びつけたトドマツの棒が立てられた。ギリヤクは、子どもの排泄物にメンスがつくと、その子の目がつぶれると信じていた。仕切りの棒は、立ち腐れになるまで切ってはならなかった。

揺籃をつり下げるために特別の板切れ（林蔵が「彫木」と表現しているように彫刻がほどこされた）が用意され、縄を利用して屋根の垂木に固定された。それから長い縄を揺籃の背および両側、下部につくられた穴に通し、縄を操作することによって揺籃が水平、垂直、斜めの、いずれの状態にもなれるようにつり下げた。シュレンクは、揺籃の背部に音のするものをつけて、動かすたびに鳴るようにしてあったとつたえている。

母親は赤んぼうを揺籃にくくりつけたまま授乳することができた。シュレンクは、ギリヤクの母親は子どもが4、5歳になるまで乳をあたえたと書いている。林蔵は、「嬰兒より四五歳に至る皆如斯し」とのべ、「含乳せしむる時は、束縛のまゝ是を抱て含ましめ、飲み終る時は又懸る事本の如し」と書いている。

ここで林蔵の記述とシーボルト訳を比較すると面白い相違点がみられる。すなわち、林蔵が「手は束縛せられて動かす事あたわず。足は屈伸すべしといへども、又自由なる事なし」とのべている箇所は、“Die Arme derselben bindet man an beiden Seiten des Brettes an, doch ihre Füße lässt man frei, damit auf diese Weise die Kinder laufen lernen können”（子どもの両手は揺籃の板の両側に固定されているが、両足は自由で、このようにして子どもは走り方をおぼえることができる）となっている [SIEBOLD, p. 1200]。言うまでもなく、林蔵の原文の方が正しい。しかし林蔵の揺籃の図は、彼の他の図に比べて出来がよいとは言えない。なお、クレイノヴィチによると、夜間、母親は子どもを白樺樹皮製の平らな揺籃（これにも腐木の屑がつめられている）にうつし、板床の自分の寝所のそばにおいた。排泄物のまじった腐木の屑は、翌朝いつも同じ場所に捨てられた [Крейнович, 1973 : p. 352]。

## 8. 住居および倉庫について

これは、林蔵の観察の中でもとくに正確でくわしい部分の1つである。

林蔵はギリヤクの建築物をつぎの4種に分けている。すなわち、(1)「穴居」、(2)「穴居せざる者の居家」、(3)「穴居する者夏月居る処の家」、(4)「倉廩」である。ところが林蔵の約45年後、ギリヤクを本格的に調査したシュレンクも、林蔵と全く同じ4つに分類している。以下、林蔵の記述にしたがって、この4種の建物を考察してみよう。



ギリヤクの住居の入口は、つねに東側にある。彼らの観念によると、太陽の沈む方向には死者の世界（村）があり、入口を西向きにすると、家族の誰かが死んで死者の村に移ることになると考えられた。

(1) まず「穴居」であるが、これはシュレンクの言う Erdjurte、タクサミの言う Полуземлянка、ギリヤク語で toryf とよばれているものである。シュレンクによると、彼が調査した頃、サハリン西岸にはこのタイプの住居しかなかったと書いているが、タクサミは、このタイプの住居は現在では全く残っていない、しかしこれを明瞭に記憶している人は、彼の調査した1960年当時なお少なくなかったとのべている [Таксами, 1961 : p. 111]。

外観は林蔵の示す図のように、土まんじゅうの形をなし、冬期には全部が白く雪におおわれ、煙出しの部分だけが黒く見えた。この住居は、内部の生活空間と、これにつづけて建てられた廊下状の入口からなっていた。

タクサミの記述によると、住居の基礎(竪穴)は7.5ないし8.5m平方で、深さ0.9ないし1.1mに掘り、そこに図5のような構造の骨組をつくった。内部の4本柱と壁との間隔は2.5m、柱(カラマツ)の高さは2.8~3mである。柱の上端には白樺樹皮を敷き、その上に4本の桁をのせた。この桁に、四方から屋根代わりの小丸太がさしかけられたが、これの下端と基礎竪穴の上端との間隔は50~80cm、小丸太の上端には1m平方の枠がつけられた。これはギリヤク語で tama khuty (煙出し穴) とよばれ、明り通りの役割も果たした。土間から煙出し穴までの高さはふつう3.5mであった。こう

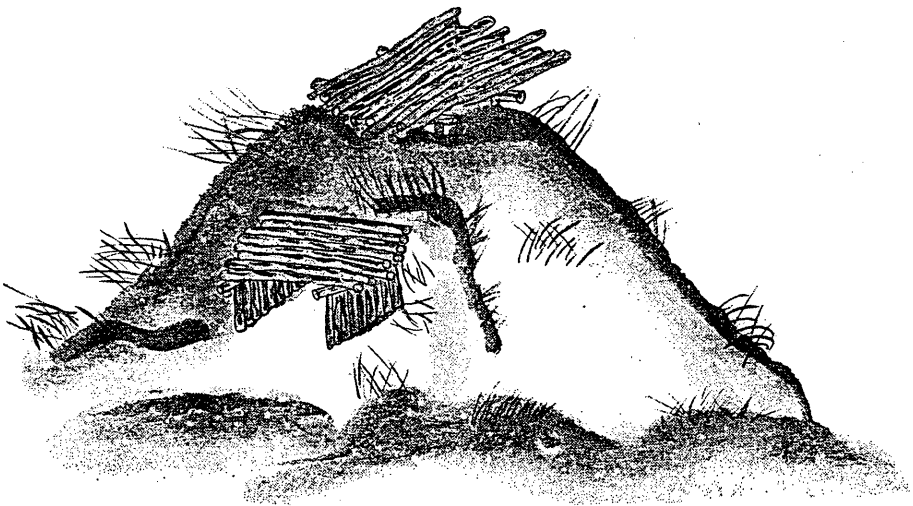


図4 ギリヤクの半地下式住居トルィフ (『北夷分界余話』より)

して、頂上を横に切ったピラミッド型の骨組ができあがると、外から干し草またはアシでこれをおおい、その上に芝生を切つてのせ、土をかけた。年を経た半地下式住居の屋根は密生した草でおおわれていた。林蔵の示す「穴居表面」の通りである。

建物の東側に1×1.3mの入口をつくり、これに枠をとりつけ、2枚の割板からなる扉をたてかけた。出入するにはその扉を左右のどちらかに移動する必要がある。しきいと土間との間には階段（丸太に刻み目をつけたものをたてかけることもあった）のある場合とない場合があり、ない場合には暗いところをたびおりにことになり、いくらか危険でもあった。ギリヤクの半地下式住居の入口が不便なことについては、シュレンクやシュテルンベルグ、タクサミによっても指摘されている[タクサミ, 1961 : p. 113]。

半地下式住居には窓はなかった。土間におりると、その左右に道具や食糧品をおく棚があり、その奥は、左右およびつきあたりの壁面に沿って板床（ギリヤク語で tikky, これは居間であると同時に仕事場、寝所でもあった）がつくられた。板床は高さ40~50cm, 幅1.8~2m。板床の上には垂木につりさげられた竿があり、これに衣服や履物をかけて干

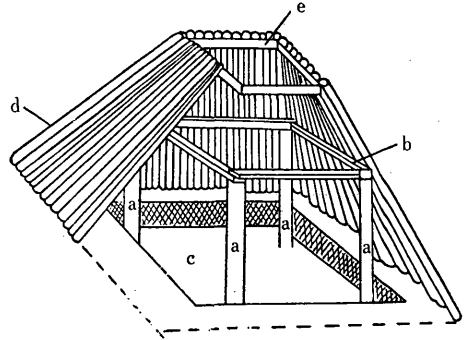


図5 トルイフの構造 [タクサミ, 1969] より  
a. 支柱 b. わく組 c. 堅穴 d. 小丸太 e. 煙出し穴

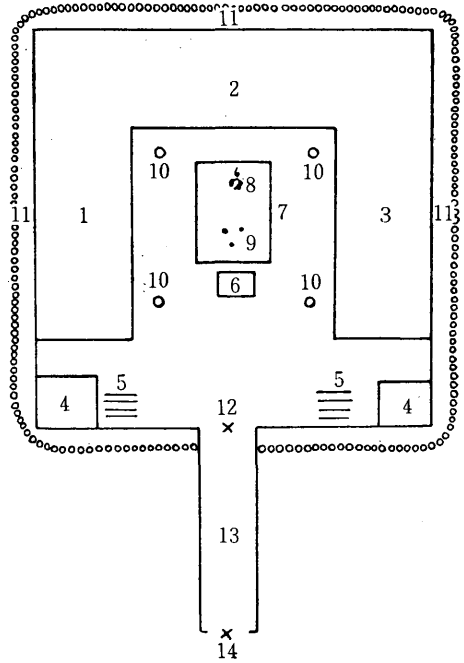


図6 トルイフの平面図 [タクサミ, 1969] より  
1~3, 板床 4. 踏板 5. 薪をおく場所  
6. 水の容器 7. 炉 8. 鍋 9. 中国製大釜 10. 支柱 11. 物置 12. 入口  
13. 入口につづく廊下 14. 外側の入口

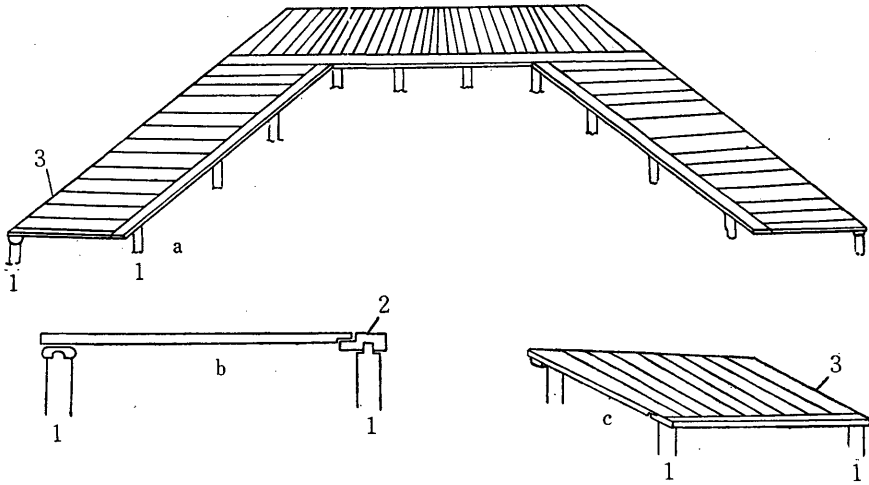


図7 トルリフの板床の構造 [ТАКСАМИ, 1969] より

a. 板床 b. 板床の組み立て c. 板床の部分  
 1. 支柱 2. 板床の桁 3. 敷板  
 この構造は夏季用住居の場合も同じである。

したり、揺籃をつけさげたりした。屋根の下端と竪穴との間の空間は倉庫の役割を果たした。屋根につくられた煙出し口の真下に長さ 2m、幅 1.5m、高さ 35~40cm の炉がきずかれ、その上に針金か棒がかけられ、鍋やかんをつり下げた。炉の前に 3 個の石がおかれ、その上に中国製の鑄鉄釜がかけられた。炉の中の土と灰は熊祭りのときだけにとりかえられた。

入口につづいて廊下または玄関口がつくりつけられ、この廊下の壁沿いに犬櫃用の犬が飼われた。ただし、冬期には屋内の土間で飼うこともあった。4 本柱の上端には kok とよばれる男女像がシャーマンの助言と長老の決定によって彫りこまれた。また後にのべるように、つきあたりの板床の一角に、tyvoyz とよばれる一種の家神像が安置された。

この半地下式住居に、たがいに血縁関係で結ばれた数家族が居住した。勿論、独身の娘や息子たちもいっしょであった。兄弟が多い場合には、数組の夫婦が同居するわけであるから、お互いの性生活までかくしようがなく、したがって、若者たちは一般に早熟であった。兄弟と姉妹が親しくならないように、きびしい規制が加えられたのもまた当然であった。

板床はその位置によって序列が定まっていた。入口の正面つきあたりは上座であって、ふつう家長が住み、また尊敬すべき客が迎えられた。つぎが入口の左側で息子た

ち夫婦、右側に家族の他の成員が住んだ。娘たちは、板床の扉にいちばん近い場所があたえられた。来客でも、それが女性であれば、上座ではなく、下座に、つまり扉近くに坐らされた [Крейнович, 1973 : pp. 265-266]。

ギリヤクの半地下式住居の構造は大要以上の通りであるが、タクサミの指摘によると、アムール河下流部でもサハリンでも全く同じであった [Таксами, 1961 : p. 116]。林蔵もまた、「蓋初島の穴居に異る事なし」と記している。

この半地下式住居は、とくに大陸部において、19世紀中頃に地上式住居、林蔵のいう「穴居せざる者の居家」にとって代わられた。シュテルンベルグは、半地下式住居がギリヤク古来の住居であると考え、ギリヤク族がかつて今よりも北方に住んでいたことの証拠をここに見ている。また彼は、ギリヤクも昔はカムチャダールの場合と同じように、煙出し穴から出入したことは、熊祭りのとき熊の死骸が煙出し穴から屋内に入れられ、祭りが終ると祭具や熊の骨が同じ穴から運び出されることによっても知られるとのべている [ШТЕРНБЕРГ, 1933a : p. 18]。

しかしタクサミはこれに反対し、熊を半地下式住居の入口から入れないのは、メンスのある女性がその入口から出入するため、メンスを忌避する宗教的な慣習にすぎないとのべている [Таксами, 1961 : p. 118]。

ギリヤクの半地下式住居の出入口が、かつてカムチャダールの場合と同じように屋根の煙出し穴と同じであったかどうかの問題は、ギリヤクの起源と関連して興味深い問題であるが、今のところ私は判断の材料をもたない。

(2) つぎに、林蔵の言う「穴居せざる者の居家」であるが、これはシュレンクが *Chineisische Winterjurte* (中国風の冬季ユルタ)、タクサミが *каркасное наземное жилище* (骨組のある地上住居) と称したもので、ギリヤク語で *chadryf* とよばれている。タクサミはこの型が「19世紀後半および20世紀初期、ギリヤクの間で最も広まっていた」と書いている [Таксами, 1961 : p. 120]。そして林蔵はこの住居についてくわしく報告した最初の人であった。

まずこの住居の規模であるが、林蔵は「大抵五六間四面乃至八間四面許 (或は縦長く横短き者あり)」としている。つまり約10~10.8m 平方、あるいは14m 平方くらいということであるが、タクサミは家族数によって異なるとしながらも、平均的には長さ10m、幅9m とのべており、林蔵の報告とほぼ一致する。

壁積みについては、林蔵は「方木を組み製し」と記して、校倉式に似た丸太積みの図をつけている。しかし壁積みの方法には、タクサミによると、林蔵の図示する方法のほか、6本(多いときには8~14本)のみぞつきの柱を立てて、それに丸太を組みこ

む方式があった。この方法は短い丸太を利用できる点で有利であるが、シュレンクもふれていないので、19世紀後半、ロシア式建築法の影響によると考えられる。ロシアには、明らかにこの2つの建築方法が現存している。丸太と丸太との間に苔をつめるようになったのは、タクサミによれば、19世紀末以後ロシア人の影響によると言うが、シュレンクはすでに“Die Ritzen zwischen den Balken werden mit Moos vertopft”（丸太のすきまは苔でふさがれた）と書いているから、必ずしも賛成し難い[Schrenck, 1891 : p. 326]。壁積みが終わると、外側、ときには内側から干草をまぜた粘土を塗った。林蔵は「冬月に至る時には四壁の表面土を粘して細隙の風を防ぐ」と書いている。

屋根は2斜面につくられた。梁の上に細丸太を敷きならべ、その上に庇の方から棟の方に干草の束を順に重ね、その上に何本かの丸太をしぼりつけて、干草が風で吹きとばされないように押えつけた。ときには干草の代わりにトドマツの樹皮を用い、その上を干草やアシでおおこともあった。林蔵が「屋根は木皮を以て是を覆ひ、其上に覆ふに雑草を以てす。風の吹散らん事を恐れて、縦横に木を伏せ、如図」と記しているのはこれにあたる。

天井はなく、天井の高さほどのところに4本ないし6本の梁が縦に走って、入口側の壁の三角部分（破風）の外側に1~1.5mつき出していた。このつき出た部分は林蔵の図には示されていない。

入口はふつう東側破風の下につくられた。扉は3~4枚の割板でつくられ、革または金具で扉枠にとりつけられた。また、春の雪解け水が流れこまないように、しきいの部分は高くつくられた。

窓はふつう7つ、まれに3つのこともあった。窓の大きさはわりあい大きく、タクサミによると、1m平方（シュレンクは3~4フィート平方）となっている。窓枠には柳か白樺の細棒を数本垂直に立てたり、十文字に組んだりして棧をつくり、これによく加工されたサケの皮を張った。紙が少ないからでもあったが魚皮の方がずっと丈夫であった。林蔵は「障子は本邦の如く格子を製し、魚皮を以て是を張る」と記している。魚皮を張った格子は、夏の間とり去ることが多かった。林蔵が「家の四方戸口有て明りを取り、また出入す」と記しているのは、この窓を「戸口」に見たててのことと思われる。林蔵が旅行したのは夏季であったので、窓を「戸口」代わりに利用しているのが観察されたのであろう。

この型の住居には独特の暖房設備があった。これは林蔵の図に正確に示されている。屋内には2つの<sup>かまど</sup>竈があった。竈の高さは板床の高さと同じであったが、ただしここでは板ではなくて、石と粘土で積み上げられた。竈の正面に方形の焚口があり、その上



不穴居者夷家

図8 骨組のある地上住居チャドリフ（『北夷分界余話』より）

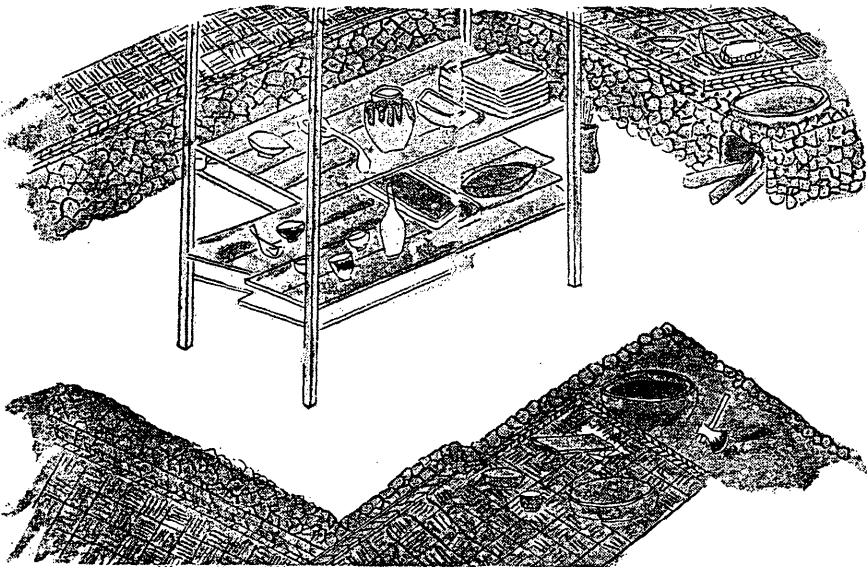


図9 チャドリフの内部（『北夷分界余話』より）

に鑄鉄製の中国製大釜がかけられた。この釜は、犬の食物を煮たり、熊祭りのとき大勢の来客のために食物をつくったりするのに用いられた。ふだんの生活では、大釜の前の小鍋が利用された。

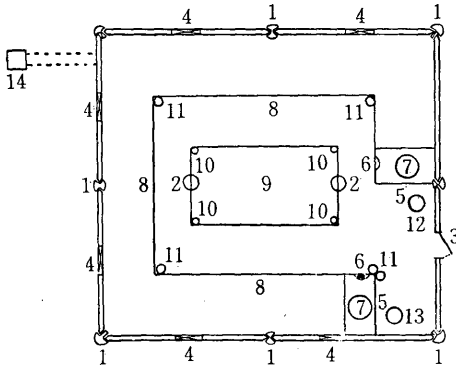


図10 チャドルイフの平面図 [ТАКСАМИ, 1969] より

1. ほぞつきの柱 2. 内側の柱 3. 扉
4. 窓 5. かまど 6. かまどの焚口 7. 釜
8. 寝床 9. 犬用の台 10. 犬用台の支柱
11. 桁を支える柱 12. 水の容器
13. 家財道具 14. 煙突

竈から左右の壁沿いに煙道がつくられ、向かって右の奥の隅で合流され、住居の外に立てられた木製煙突で排出された。林蔵はこの部分をつぎのように表現している。

「家の裏<sup>ウチ</sup>牀四方に設けて其表面石を置て是を築き(他のタイプでは板床)を、其内を空虚にし(つまり煙道にしてあること)、其両端戸口の処に至る側と上面を穿て竈となす。故に其次煙竈の外に出ずして悉く牀中を廻て家の四隅に達して後家外に逮て筒木(木製煙突)中より発し去りぬ」。

実に、簡にして要を得た記述であ

る。煙道の上は板床の代わりに石と粘土で「牀」が積み上げられ、それにむしろが敷かれた。こうして朝鮮家屋における<sup>おんども</sup>温突と同じ原理によって、寝床の下はあたためられ、林蔵の言うように「厳冬積雪の時といへども家内温暖にして穴居せずといへども可なり」であった。人々はこの寝床の上で、足を窓側にして眠った。この部分のシーボルト訳は正しくない。

“Längs den wänden sind eine Art Bänke angebracht, d.h. eigentlich eine niedrige Steinmauer, die rund herum die Ruheplätze bildet. Der Raum in der Mitte ist frei. Da, wo der Heerd steht, befindet sich oben im Dache zum Durchgang des Rauches ein viereckiges Loch, doch hat man in manchen Wohnungen auch eine Röhre, die durch das Dach den Rauch führt, und dadurch diese so warm macht, dass man wohl Höhlenwohnungen entbehren könnte.” [SIEBOLD, p. 1201]. 以上のうち、「炉のある場所の上方、屋根には煙出し用の四角な穴があるが、しかし多くの住居には屋根を通じて煙をみちびくもう1つの導管があり、そのために屋内は穴居を必要としないほどあたたかい」の部分には、石と粘土でたたまれた寝床のことも、屋外に立てられた煙突のこともふれられていない。ここには明らかに、半地下式住居の炉との混同がみられる。ただし林蔵の言う「其両端戸口の処に至る側と上面を穿て竈となす」の「上面」がよくわからない。奥の隅、左右煙道の合流する場所はギリヤク語で *ulk-zankh* “高い隅”とよばれ、「悪霊が家中に入るのを

防ぐために」平たい大きな石がおかれた。あるいは「至る側と上面」は、「至る側の上面」の誤記かも知れない。満鉄弘報課編の口語訳『東韃紀行』では、「火焰が全部石畳の下を通っても家の中に烟が洩れずに隅に設けてある煙筒から室外に吐き出される装置になっている」となっている。林蔵が「家の四隅に達して後家外に逮て筒木中より発し去りぬ」と書いていることと比べると、明らかな誤訳である。煙突は屋外に、家から少しはなれて立っているのである。

屋内の土間の中央には「閣<sup>クワ</sup>を設け、飲食の雑具其他日用の器械は総て此閣上に貯ふ」との林蔵の記述がある。タクサミによると、この棚の高さは、欠如している天井くらいであった。しかし土間の中央につくられた犬を飼うための長い板（ギリヤク語で kangyl）のことは、シュレンクやタクサミ、クレイノヴィチらによってふれられているが、林蔵はどのようなわけか言及していない。

この型の住居は、ギリヤクだけでなく、ウリチ、ナナイ（ゴールド）、ネギダールなどツングース系諸族にも広まっていた。しかし、地上式であり、窓が多いので明るいことは明るかったが、その反面、冬など寒風が吹きこんでひどく寒かった。入口につながる廊下の部分がないことも寒さの原因となった。煙道の上の寝床だけが熱く、必ずしも快適ではなかったようである。

シュレンクは、この型の住居が nach chineisischem Muster erbaute Winterjurte

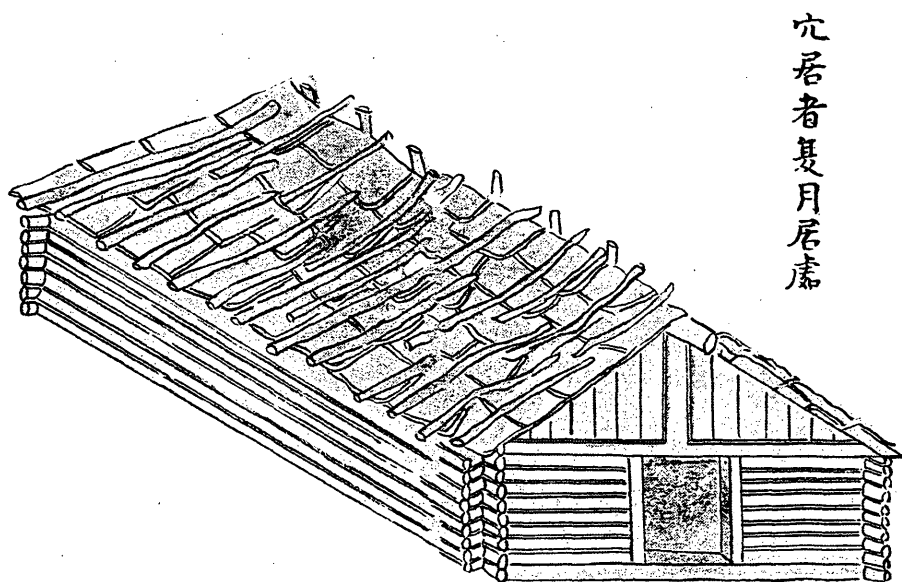


図11 ケルイフの外観（『北夷分界余話』より）



(中国の模範にしたがって建てられた冬季ユルタ)としており、たしかに若干の点で満州の中国人の家屋に似ていることも事実である。しかし満州の家屋は、壁の材料として干草をまぜた粘土塊や煉瓦が利用されたし、また寝所と炊事場は仕切られていた。イワノフは、この型の住居が、古来の現地的要素と中国人から借用した要素との折衷であると考えている [ИВАНОВ, 1951 : p. 77]。

なお、シュレンクは1戸内に4家族、全部で15~20人、シュテルンベルグは1戸内に30~40人が同居したとのべている。

(3) 林蔵の言う「其穴居する者夏月居る処の家」は、シュレンクの分類によれば Sommerjurte、ギリヤク語で keryf (海の家、海岸の家) とよばれている。ギリヤクはふつう春の訪れとともに海岸または河岸の夏季用住居に移った。タクサミによると、ギリヤクが冬季用住居に住むのは10月からアムール河の解氷、つまり翌年の5月までであって、それ以後は夏季用に移った [ТАКСАМИ, 1961 : p. 102]。

夏季用住居には、地上にじかに建てる地上式と杭上に建てる高床式とがあった。林蔵によれば、夏季用住居は「其製総て同じといへども、戸口は一処のみ是を設て外に出入する処なく、窓を屋上に開いて透明の処となし、牀は三方に設くといへども石を以てせずして板を用ゆ。家の中央に大なる炉を製して外に竈を設けず」となっている。この林蔵の記述は明らかに「地上式」のもので、内部の構造は、さきあげた半地下式住居(林蔵の言う「穴居」)によく似ていた。すなわち、地上に建てられ、屋根が

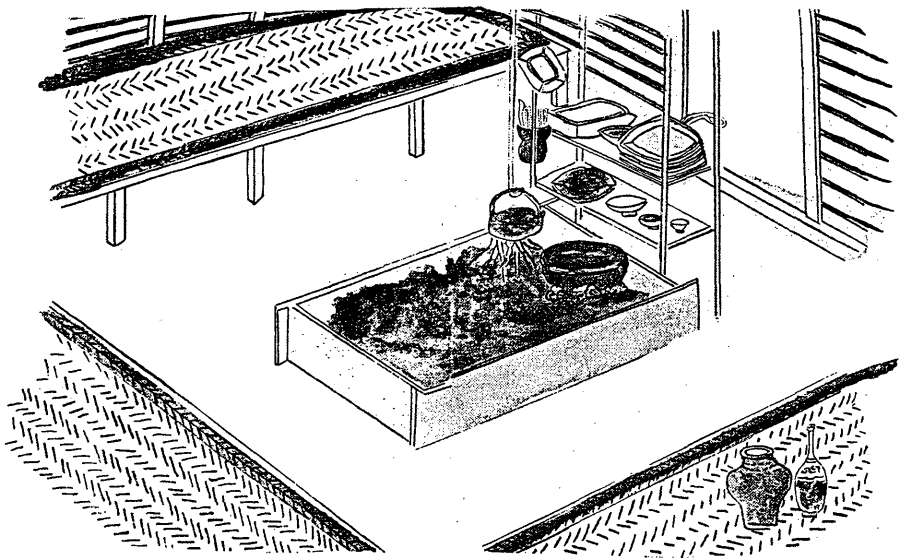


図12 ケルイフの内部(『北夷分界余話』より)

2 斜面になっている点は半地下式とちがうが、明りとりと煙出しの役割をかねる穴が炉の真上、屋根にあけられていることでは同様である。屋根の穴はギリヤク語で tana-khyty とよばれた。建て方はチャドリフに似ている。

(4) つぎは林蔵の言う「倉廩」である。これはシュレンクが Vorrathshaus と称し、ギリヤク語で nyo とよばれるが、規模によって夏季用住居にも用いられる。林蔵も、この建て方を

「又居家に同じ」とのべている。夏季用住居に用いられる場合、タクサミは Срубный летник на сваях (杭上の夏季用住居) と称している。

タクサミによると、住居の場合、杭としてふつう直径 20cm 前後の丸太が 1 列につき 7~8 本 (2 列でその 2 倍) 用意され、地上高 1.2~1.4m に固定された。この場合、林蔵がつたえるように「山に行て木を掘りて根の殊に蔓延し地上に置いて転倒せざる物を撰み、持来て礎」となすこともあった。杭の場合も木株の場合も、その上端切口と桁との間には、地面の側にそりかえた板または白樺樹皮が敷かれた。これはギリヤク語で nigyvr とよばれ、ネズミが上にはい上らないようにしたものである。林蔵は文章には書いていないが、図には明示している。このネズミ除けのことは、鷹部屋福平著『北方圏の家』にも示されていない。しかしタクサミやクレイノヴィチらの著作には、ギリヤクの杭上建物の一特徴として明示されている。

杭上または木株上には長さ約 13m の桁丸太をおき、これに幅約 7m に床丸太を敷きならべた。その床の上に、両縁から 2m 入ったところに、7~8 段の丸太積みによる壁をきついたが、林蔵の図でも 7~8 段に示されている。丸太積みはだいたい 6m 平方、高さは 1.3m であった。

この部分のシーボルト訳はつぎの通り。“Ihre Magazine sind auf dieselbe Weise wie die Hütten gebaut, ausgenommen, daß sie auf abgehauenen Baumstämmen über der Erde erhaben stehen” [SIEBOLD, p. 1201]。これによると、倉庫は住居 Hütte と同じであるが、ちがう点は木株の上に建てることだ、ということにとれる。しかしタクサミらの研究にしたがって林蔵の記述をよむと、「倉廩の製又居家に同じ」であって、両者とも木株を利用したことが知られる。タクサミは、夏季用の杭上住居が、サハリンおよびアムール河口部のギリヤクによって keryf とよばれ、河口からはなれた上流部のギリヤクは倉庫 nyo とよんでいることに注目し、もともとは干魚

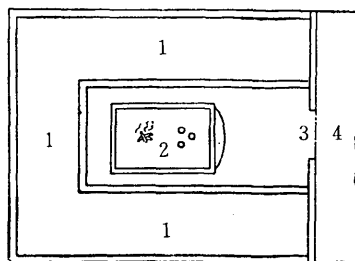


図13 夏季用住居ケルィフの平面図  
[タクサミ, 1969] より  
1. 板床 2. 炉 3. 入口  
4. 縁側

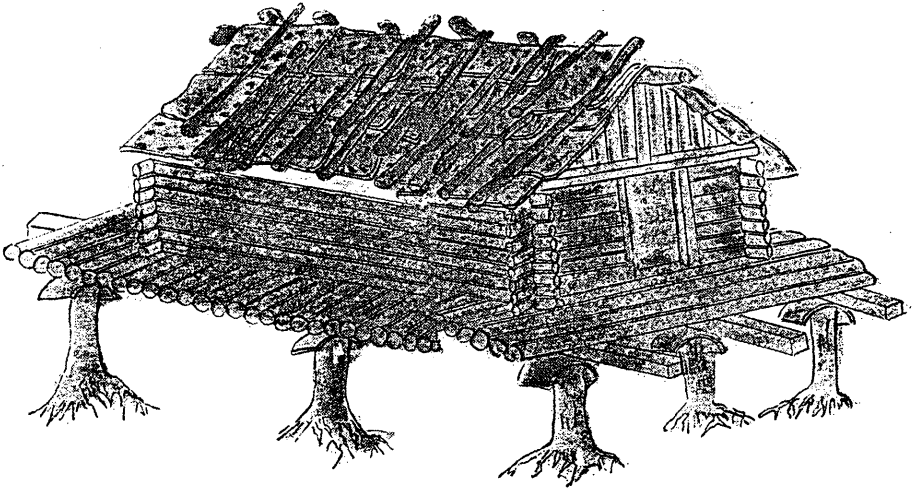


図14 ギリヤクの倉庫および杭上式住居の外観（『北夷分界余話』より）  
支柱と桁との間にあるネズミ除け板に注意

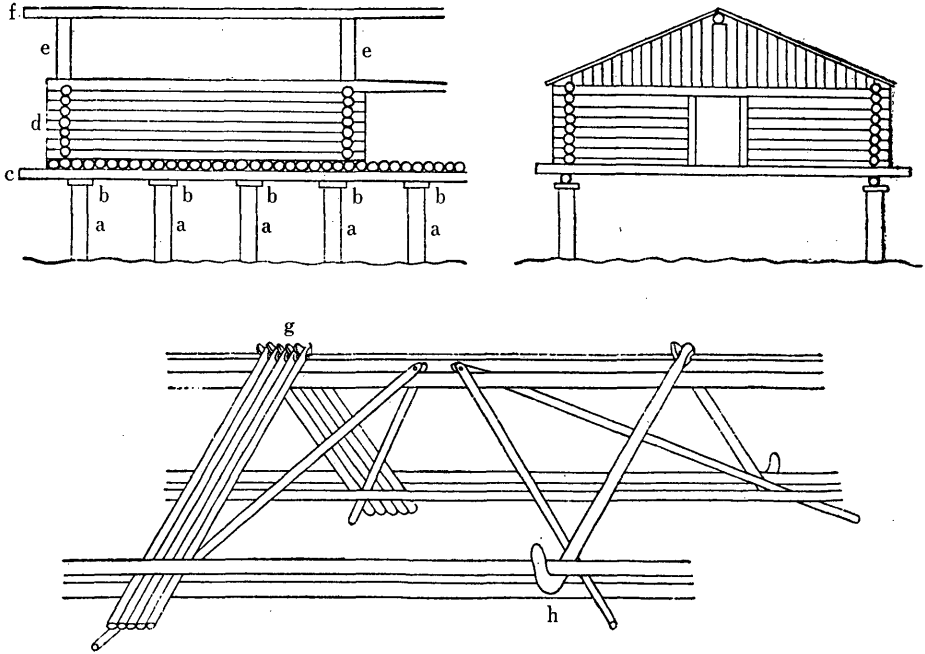


図15 倉庫および杭上式住居の構造 [ТАРСАНИ, 1969] より  
a. 杭または木株 b. ネズミ除け用の薄板または白樺樹皮 c. 桁 d. 丸太積み  
e. 支柱 f. 棟木 g. サルヤナギの小丸太 h. 端末を曲げた小丸太

を貯蔵する倉庫であったものが、住居にも利用されるようになったのであろうと考えている [ТАКСАМИ, 1961 : p. 141]。とすると、沖縄あたりの高床式倉庫も連想され、なかなか興味深いものがある。少なくとも、ヤクートなど、シベリア内陸部にこうした高床式建物は見あたらないようである。

以上のほか、ギリヤクの集落 *vo* には、女性がお産のときに移り住んだ産小屋、熊祭り用の熊を飼うための檻、熊祭りの祭具を保存するための小倉庫などの建物があったが、ここではくわしく立ち入らないこととする。

### 9. 犬の飼養について

シュレンクは、ギリヤクの生活における犬の圧倒的役割を指摘し、それが輸送だけでなく、衣服に用いられる毛皮、食糧としても重要であること、しかもアイヌをのぞいて、アムール河下流部のいかなる民族もギリヤクのようにこれを食用にするものはないとのべている [SCHRENCK, 1891 : p. 478]。

林蔵はギリヤクの犬飼養について「貧富の者に論なく家々是を飼さるものなし。その恵養の厚き事又南に倍せり……」と書いている。シーボルト訳では「その恵養の厚き事……」以下の文章が抜けている。しかしこの部分は、ギリヤクの特徴の1つとして重要かも知れない。クレイノヴィチは書いている。「家のそばに杭が立てられ、それに犬のつながれていないニヴヒ（ギリヤク）の住居は1つもない。それは彼らの生活の不可分の特徴である。犬なしのニヴヒは考えることもできない」 [КРЕЙНОВИЧ, 1973 : p. 155]。

犬は彼らにとって冬期における唯一の輸送手段であり（犬橋）、薪や干魚などの運搬だけでなく、「山獺を助け」、タタール（間宮）海峡では小舟を引くのにも利用された。小舟は荷物の輸送だけでなく、網をとりつけて漁撈にも用いられた。犬はその小舟を水際の岸辺を走りながら曳くのである。林蔵も犬による舟曳きのことを図示している。

林蔵は『北蝦夷図説』（『北夷分界余話』）の卷三二、サハリン・アイヌの記述のところで犬のことを精細にのべている。シュレンクは、“Bei den Aino auf Sachalin spielt der Hund im Allgemeinen gang dieselbe Rolle wie bei den Giljaken”（サハリンのアイヌにおいても、犬は一般にギリヤクにおけると同じ役割を演じている）とのべている [SCHRENCK, 1891 : p. 487]。したがって、原則として林蔵の卷三二の記述は、ギリヤクにもあてはまると考えられる。林蔵も「その用る所は初島の所用に異なることなし」とのべている。

ギリヤクは犬が老衰で死ぬことを好まず、使いものにならなくなると、腹いっぱい食わせて殺し、肉は食用、皮は衣服に用いた。ただし林蔵によれば「家狗の病みて死するものは、只其皮を取のみにして其肉をくらはず」であった。また「児犬漸に長じて後、其猾猛なる者を撰て家狗となし、其懦弱にして用に堪ざるもの、或は牝犬の小儒にして乳せしむべからざるものは、悉く経<sup>くび</sup>り殺て其皮を取り、肉を喰ふ」た。林蔵はつづいて、犬の「陰囊を破りてその陰卵を取去る」方法についてくわしくのべている。

ギリヤクにおいて、犬は交換の対象としても価値があり、婚資に用いられる小舟、アザラシ皮、脂、銀、絹なども交換された。犬籠1台には少なくとも10頭の犬が必要であり、貧しくてわずかな犬しかもたない者は他人からこれを借りた。クレイノヴィチによると、ギリヤクの間ではかつて冬期に犬籠の競争が行なわれた。ときには長距離にわたり、サハリンではチャイヴォからヌィヴォまで65kmに及んだという。

犬はまた、宗教的な禁忌を破った場合、霊に許しを乞う手段でもあった。つまり自分の持犬を殺して霊をなぐさめたのである。また人間どうしでも、しきたりに反した場合には代償として犬をあたえた。

ギリヤクは、各人が3頭の聖なる犬を所有していた。すなわち、山と水の霊および火の主人に献げた犬である。熊祭り用の熊を飼う人は、この熊に献げた犬を飼った。これらの犬には、それぞれ山、水、火、熊の霊に献げた供物の残りがあたえられた。林蔵が「一家の内男女の論なし、各犬を養い、是は家翁の犬、彼は老嫗の狗、嫡子の嫠、二男の<sup>12</sup>尨など称して各三頭五頭を養ふ。故に一家の養ふ処といへども其数許多なり」と書いているのはこれにあたる。

クレイノヴィチの研究によると、ギリヤクの伝承では、最初の犬は天から降ってきたとも、死後別の世界に生きつづけるとも言われている。また、犬は太陽や月にも住み、人間の死後、人間の霊は犬の体内に移るとも考えられた。子どもの乳歯は犬にあたえられ、犬の頭蓋骨は、家を守り、その住人をあらゆる災難から守るものとして、家の入口の上の屋上においた [Крейнович, 1973 : pp. 155-159]。

林蔵は「大犬、小犬に限らず、撫育の懇至なること枚挙すべからず。実に小児を養育するが如し……」と書いている。(未完)

## 文 献

- АНТРОПОВА, В. В., 1957, Военная организация у народов крайнего северо-востока сибиря, *сибирский этнографический сборник II*.
- 洞富雄, 1963, 『間宮林蔵』, 吉川弘文館。
- ИВАНОВ, С. В., 1951, *Старинное зимнее жилище ульчей*, СБ. МАЭ, Т. XIII, М.,-Л.
- ХОДЖЕР, Г. Г., 1964, *Конец большого дома*, Хабаровск.
- КРЕЙНОВИЧ, Ч. А., 1973, *Нивхгу*, Москва.
- 間宮林蔵, 1810, 『北夷分界余話』, 国立公文書館蔵。
- 間宮林蔵, 1938, 『東韃紀行』(再版), 南満州鉄道株式会社総裁室庶務課。
- САВЕЛЕВА, В. Н., ТАКСАМИ, Ч. М. 1970 *Нивхско-русский словарь*, М.
- SCHRENCK, Leopold von, 1881-1895, *Die Völker des Amur-Landes*.
- ШТЕРНБЕРГ, Л., 1933а, *Гиляки, Орочи, Гольды, Негидальцы, Айны*, Хабаровск.
- , 1933b, *Семья и Род*, Ленинград.
- SIEVOLD, Ph. Franz von, 1832 *Nippon*.
- СМОЛЯК, А., 1956, *Народы Сибири*, М.-Л.
- , 1970, Социальная организация народов нижнего Амура и Сахалина в XIX-начале XX в., *Общественный строй у народов северной Сибири*.
- , 1975, *Этнические процессы у народов нижнего Амура и Сахалина Середина XIX-Начало XX в.*, Москва.
- ТАКСАМИ, Ч. М., 1961, Селения, жилые и хозяйственные постройки нивхов Амура и западного побережья о. Сахалина (Середина XIX-Нач. XXV), pp. 98-166, *Сибирский этнографический Сборник III*, М.-Л.
- , 1969. *Первобытно-Робовые отношения Религиозные верования у Нивхов*, Сб. «Страны и Народы Востока» Вып. VIII, М.